

e ポートフォリオを活用した大学生の キャリア形成学習プログラムの開発研究

新居田 久美子

Kumiko Niida

神戸学院大学人文学部

要旨：本研究の目的は、新たなキャリア形成学習プログラムとして、e ポートフォリオ (manaba course) を活用した PBL 型授業を導入すること、そして講義の前半と後半の学生のコンピテンシー (人間関係・自律性・道具活用) とキャリア意識の比較および学年別 (1 年生と 2 年生) の比較検証により、キャリア形成の効果に焦点を当てた学習プログラムを構築することである。質的・量的調査の結果、将来のために「職務遂行に必要な基礎学力を身につける」「気持ちの良い受け答えの仕方やマナー態度を学ぶ」、については授業後半では有意に得点が高くなり、基礎学力の重要性やマナー・態度に対する認識が向上していることが示された。一方、「挨拶をする」行為に対する認識は 2 年生のほうが 1 年生よりも有意に低かった。学習意欲の低下防止のためにも、学びの記録と成長の可視化を促す「キャリア形成カルテ」を活用する必要がある。以上のことから、e ポートフォリオを活用した PBL 型学習プログラムによる教育成果の可能性と、学生のキャリア形成を整備する重要性が示唆された。

キーワード：キー・コンピテンシー、e ポートフォリオ、PBL 型授業、学習カルテ、キャリア教育

第 1 章 研究の概要

1. 背景

テクノロジーの発展、グローバル化の進展、少子高齢化が加速する昨今において、職業社会もまた急速な変化に見舞われている。大学卒業後に大学の学習内容がすぐに陳腐化するような教育ではなく、学習の基礎力や汎用的スキルを習得し、将来のキャリアの変化にも対応できるようなキャリアについての基本的知識やスキル、姿勢を身につけることが求められている。一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎的知識、能力や態度の形成を促進することが、大学におけるキャリア発達教育の意義とも言える。

平成 8 (1996) 年 7 月、中央教育審議会答申 (「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」) は、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は「生きる力」とであると提言した。平成 14 (2002) 年度から実施されている学習指導要領では、「生きる力」を育むことを理念とし、知識基盤社会の現代においてその力がますます重要となることから、これを継承し、生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成を重視してきた。また、教育基本法改正等を踏ま

え、以下の「学力の重要な 3 つの要素」の育成が規定された。その要素とは、①基礎的な知識・技能をしっかりと身につける、②知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育む、③学習に取り組む意欲を養う、の 3 つである。こうして、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の育成の両方が大切であり、それぞれの力をバランスよくのばしていく指導が学習指導要領で示されていくこととなった。すでに、2017 年の幼稚園から順次実施が始まっている学習指導要領改訂では、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を「資質・能力の三つの柱」とし、新しい学習指導要領の方向性を示している。知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が学習方法として求められ、知・徳・体にわたる「生きる力」を育む一方で、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出し、結果、「何ができるようになるか」が強調される。

近年、小学校から大学にいたるキャリア教育においては、この「生きる力」の向上の文脈の中で、とりわけコンピテンシーに基づく人間力の育成が重視される。コンピテンシーとは、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用し

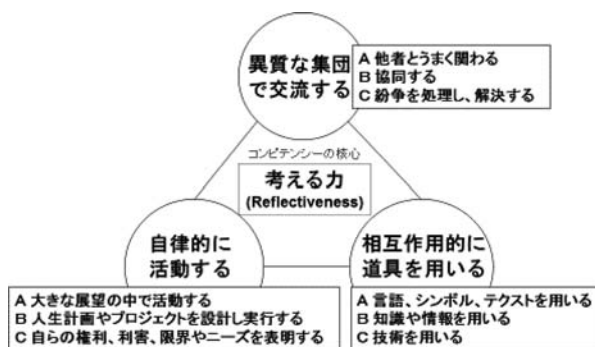


図1 3つのキー・コンピテンシー（立田，2014）

て、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができるとされ、人が自身に内在するあらゆる資源や外部資源を自ら結集して、社会の課題解決の要求に応える能力である。1997年末から2003年にかけて、OECD（経済協力開発機構）の提起により、OECD-DeSeCo（Definition and Selection of Competencies）プロジェクトが実施された。その目標は、20世紀後半に先進国に広がる多様なコンピテンシー概念の教育における再定義と枠組みの構築であった。その結果、2003年に出版された最終報告書『Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society』において3つのキー・コンピテンシー（「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」）が提示された。図1に示したように、この3つのコンピテンシーは、相互に深い関係を持ち、その中心には「考える力」（反省の力）がある（立田，2014）。キー・コンピテンシーについては、その後多くの類似概念（EUのキー・コンピテンシーや日本の社会人基礎力、人間力等）が生まれているが、現在の国際調査、生徒を対象にしたPISAや、成人を対象にしたPIAACでも、このキー・コンピテンシーを基本として展開されてきた。そこで、本研究では、職業人に必要とされるこのコンピテンシーを大学生教育に適用することによって、大学から社会への円滑な移行を図ることを試みる。

2. 内容と特色

(1) 3つのコンピテンシー（キャリア形成基礎力）

文部科学省が提唱する大学生の「学士力」では、知識・理解、総合的な学習経験と創造的志向、汎用的技能、態度・志向性の4つが求められている。このうち汎用的技能や態度・志向性については、平成23（2011）年中央教育審議会答申の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において示されている①「人間関係形成・社会形成能力」、②「自己理解・自己管理能力」、③「課題対応能力」、④「キャリア・プランニ

ング能力」などが、社会的・職業的自立と社会・職業への円滑な移行に必要な「基礎的・汎用的能力」にあたる。本研究では、この4つの能力を、「人間関係コンピテンシー（人間関係形成・社会形成能力）」、「自律的コンピテンシー（自己管理能力、キャリア・プランニング能力）」、「道具活用コンピテンシー（課題対応能力、言語能力、SPI能力）」としてとらえ、キャリア形成基礎力の尺度とする。

(2) 将来のための学習意識とキャリア意識

もう一つの尺度として、学生が大学生活において、将来のために意識していることや取り組んでいることなどを、将来のための学習意識としてあげる。例えば、溝上（2009）は、学生生活の過ごし方と、将来設計や充実感との関連を明らかにしている。さらに、キャリア意識を探るため、下村・八幡・梅崎・田澤（2013）によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）を使用し、検証する。

(3) キャリア形成カルテ

人文学部の学生のキャリア形成に必要な学修カルテとして、新たに「キャリア形成カルテ」の開発を試みる。同カルテの類似資料として、本学ではすでに立田（2018）が教職課程「履修カルテ」の開発を行っている。本研究では、人文学部生のキャリアデザインに関わる学修カルテとして、教職を含むあらゆるキャリア選択の可能性を開く「キャリア形成カルテ」の開発によって、自律性を促せる学習システムの開発の足がかりとする。本研究における「キャリア形成カルテ」とは、学習歴（成績・履修・資格等）、キャリアデザイン（自己分析・実習活動歴等）、就職活動歴などの学生カルテ情報を集約したものを意味する。

(4) eポートフォリオシステム（manaba course）

学生の既有知識や、現状の能力、自分を取り巻く環境などを踏まえたふり返りを促すために電子的学習ポートフォリオ（以下、eポートフォリオ）に着目する。そもそも、学習ポートフォリオは、学習プロセスやそこから生まれた成果物を蓄積し、それらをふり返る機会の提供を可能とし、それにより今後の学修計画や目標の再設定に利活用することができる。立田（2011）は、このeポートフォリオには、主として、次のような機能があるとしている。第1は、学習を基盤とした電子的支援システムであることだ。学習支援を主とするこのシステムでは、授業への意見や感想、資格といった学習記録に加え、自分が制作した作品や音楽、日記によるストーリーテリングなどの学習成果を蓄え、学習者が収集し記録した知識の整理を通じて、自身のふり返りが日常的にでき

るような構造を持つ。日常的な記録を中心に累積した情報や知識の整理を通じて、知識の習得だけではなく、知識の活用や新たな知識の創造に向けての学習を支援するという機能が重要であり、成果とそのプロセスが重視される。第2は、アセスメントの機能を重視するシステムである。このシステムでは、学習活動だけではなく、学校や社会での活動、集めた単位や資格などを含めた学習者の「総括的な評価」、アウトカムを評価する。学習支援システムが個人により運営される傾向があるとするれば、こちらは、むしろそうした学習者を管理し、支援する教師や学校といった制度側がそのマネジメントを行うシステムである。第3に、大学卒業後のキャリアとつながるシステムがある。大学時代を通じて学び、活動したことを自分なりに整理し、社会に出てからの活動へとつなげていくためには、学生にとっての学習システムでも、大学にとっての評価システムでもない、もう一つの機能が重要となってくる。それが、キャリア発達を基盤としたeポートフォリオシステムである(図2)。

そこで、この学習ポートフォリオをより効果的にするために、クラウド型教育支援システム(manaba course)を活用する。eポートフォリオを用いた学習の最大の利点は、学習の効率化を図ることにもあるが、それ以上に、受講者の自己主導型学習の機会を増し、受講者自身の学習の成果を電子上に残していく点にある(立田, 2018)。若者のキャリア発達の影響を検証した Reardon・Lumsden・Meyer, (2005) は、eポートフォリオの活用が学習者中心の学習に利用できた場合に、学習経験を深め学習目標や学習方略を決定し、結果的に自己の振り返りをする認知的な支援につながることを明らかにしている。また、山田・溝上(2018)は、eポートフォリオに年度や学期などの単位で学習目標を記入する取り組みを行い、教学的な教育・入試改革の検証や改善にまで活用できるような網羅的なeポートフォリオシステムを設計・開発している。このような学生自身の学びの足跡を可視化し、さまざまな活動を通して電子ファイルに一元化していく機能をもったeポートフォリオは、「キャリア形成カルテ」の自己評価とライフデザインのための基盤情報となる。

以上のことから、本研究では、本学の学生が学外からもクラウド上でeポートフォリオシステムが活用できるようにクラウド型教育支援システム(以下、manaba course: 榊朝日ネット)を選択した。一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育て得る可能性の高い教育支援ツールとして導入を試みる。

学習成果の評価

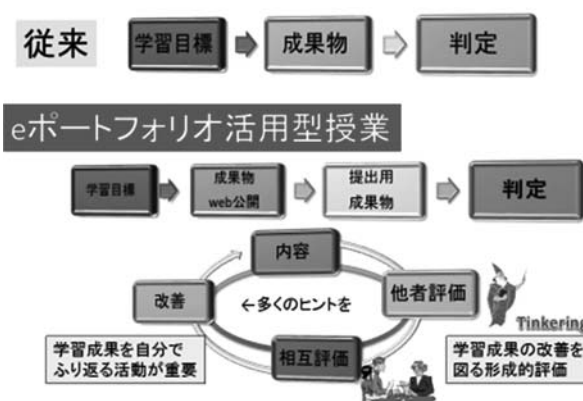


図2 ポートフォリオの評価の特徴

3. 研究の目的

1) eポートフォリオシステム、manaba courseの利用により、学生のキャリア形成基礎力である「人間関係コンピテンシー」、「自律的コンピテンシー」、「道具活用コンピテンシー」の向上と、学習意欲とキャリア意識を高めるプログラム開発を試みる。

2) キャリア形成関連授業の前半と後半、また1年生と2年生について上記3つのコンピテンシーと、将来のための学習意識とキャリア意識に対する変化を追う。

3) キャリア形成関連講義の成果から、「キャリア形成カルテ」を作成し、あらゆる進路選択やキャリア・プランニングを可能にすることで、学生のキャリア形成を援助する。

そこで、本研究では、筆者の1年生ゼミ生、及び1・2年生のキャリア形成関連講義受講者を対象とした調査からキャリア形成カルテを開発し、eポートフォリオの教育効果のうち、キャリア形成の効果に焦点を当てた学習システムを構築することを目的とする。

第2章 研究の計画と方法

1. manaba course の活用計画

eポートフォリオの代表的なシステムの一つである株式会社朝日ネットのmanaba courseは授業中のみならず、教室外でも学生と教員をサポートするクラウド型教育支援システムである。パソコン・スマートフォン・タブレット等、多様な端末に対応しており、ネットワーク環境があればいつでもどこでもアクセス可能であり、チャットメッセージが送受信できる。データの揭示、成果物の提出、成果物の相互閲覧機能も備え、出席管理・アンケート・小テスト・掲示板・ポートフォリオ機能の基本的ツールが用意されており、授業の効率化や、学習の

可視化などによる教育の質的向上が期待されている。また、管理者が事前にアカウントを作成して、各学生にID・パスワードを付与するため、個人情報も明かされることもなく、不適切な表現や投稿画像も監視・削除でき、管理者である教員が徹底した情報管理を行うことができる。

2017年9月上旬より1月中旬までの半期において、manabaポートフォリオを筆者が担当する科目に導入した。授業内では、システム上に、キャリア形成入門Ⅱのコース、キャリア形成講義Ⅳ、そして基礎演習コースを開設した。また、コースコンテンツとして、プロジェクト型学習を中心とした政治、経済、社会、雇用問題などの問題提起を行い、解決のための主張や成果物作成に取り組めるよう活動方法をインターネットから集めデータベース化した。また閲覧機能を使用して提出物を相互共有し、解決のための資源とした。さらに、チームを組み、受講生間の意思決定やプロセス構築を通して合意形成を行うことで、一人一人のアウトカムの可視化を図った。このmanaba courseのeポートフォリオに、キャリア形成カルテを設計する基となるさまざまなプロジェクト型学習を実施・評価する中で、学生のキャリア選択に応じたキャリア指導を行う。つまり、キャリア形成関連シラバスに沿ってチームを形成し、オンライン上でディスカッション（チャットコミュニケーション）や、対面での議論を加えながら、PBL（Project-Based Learning）型授業を実施した後、eポートフォリオの評価を行い、キャリア形成カルテの作成に活用した。

このPBL型授業の前半と後半に、「コンピテンシーに関する質問」「将来のための学習についての質問」（巻末：資料1-1、1-2）と、キャリア形成基礎力である「人間関係コンピテンシー」、「自律的コンピテンシー」、「道具活用コンピテンシー」の3つのコンピテンシーの変化と、将来のための学習意識とキャリア意識の効果の比較をおこなった。

2. PBL（Project-Based Learning）型授業

湯浅・大島・大島（2010）は、PBL型授業を、学習者が複雑な課題を元に自らの活動をデザインし、問題解決、意思決定、調査活動といった問題に基づく活動を遂行していく中で、真正性の高い問題をグループで取組むという自己主導学習であると述べ、学習者の動機を高め、転移可能な知識の自力構成を促進する学習活動だと示している。また、教師はそのプロセスをサポートするファシリテーターの役割を担うという活動デザインを持つ。学生中心の教育手法で、答えが一つではない問題を解決する経験を通し、新しい学習指導要領に示される主

体的・対話的で深い学びの実現を目指した。学生は、多様な価値観と多岐にわたる解決策を見出すためには、さらなる知識の獲得と、仲間との協働が必要であるということに気づき、最終的に学習意欲が向上することを狙う。manaba courseで実施したPBL授業の主なコースコンテンツの内容を、表1に示す。科目ごとのプロジェクト課題は、3つのコンピテンシーの向上と将来のキャリア形成のための学習意欲の向上、そしてキャリア意識の向上を目標とした学習方略とそのプログラムである。

本授業の設計の趣旨は、学習者に何をできるようになって欲しいかを伝え、彼らにそれをするように教え、実際にそれをできるようになったかを見るだけである（Biggs J. & Tang C, 2011）。上記のコンテンツに沿って、方針を確認してプロセスとグループ活動を評価した。また、学生同士がフィードバックしながら、関係形成をはかることで授業への参画意欲につないだ。中でも、効果的なのは「スレッド」と呼ばれるチャットツールだ。manabaのプロジェクトタブの制限内でチーム間に限られた会話とデータ共有が可能であり、チームメートが自由闊達な議論を行える掲示板である（図3, 4）。

これらのコンテンツは、一見、日常的な何気ない問題ではあるが、学生にとってのハードルをさげながら、多数の他者とのコラボレーションで日常の疑問の解決を試みるプロジェクト学習を目的とした内容である。多角的に集めた情報を共有し、精査し、批判的考察と合意形成を繰り返し、組織の目標達成に向かって取捨選択を行いながら、仕事を成功させていく模擬体験プロジェクトとして機能させた。また、本研究では、学習とは社会的な活動から生まれるものである、と言う理論に沿って行う。van Harmelen（2008）が示す社会的構成主義では、知識はその社会的相互作用の中で、またその社会的相互作用の結果として創られるものである、としており、知識に基づく学習もまた社会的相互作用によって影響を受けると考えられる。したがって、PBL学習を実施する際には、教室内では自由席の形式をとらず、敢えて親しくない友人にあたるようランダムなチーム編成を1ヶ月半ごとに行うなど、多様なPBL型授業による人間関係コンピテンシー、キャリア意識、そして学習意欲の向上を目指した開発プログラムを実施した。

3. 調査時期と対象者

2017年度後期人文学部専門教育科目の受講生1年生（70名）・2年生（54名）にmanaba course上でのWEBアンケート機能を使用して調査を実施した。内訳は、「キャリア形成入門Ⅱ」受講生53名、「キャリア形成講義Ⅱ」受講生54名、「基礎演習」受講生17名であり、

表1 manaba course 上で行った PBL 型授業の一例

	キーワード	コンテンツ・教材	授業形態	成果物	科目	学年
1	コミュニケーション力	内的動機づけの大切さ (TED TALKS) *1	チームスレッド (チーム内でチャット)	Word でチームごとに提出	キャリア形成講義Ⅱ・入門Ⅱ	2
2	〃	質の高いコミュニケーションをとるための 10 の方法 (TED TALKS) *2		manaba アンケート	キャリア形成入門Ⅱ	1
3	学習意欲	大学入試の国際比較 *3 大学入学目的の変化 *4	グループディスカッション (GD)	Word (班ごと提出)	キャリア形成入門Ⅱ	1
4	〃	大学でやっておくべき 10 のこと *5	チームスレッド・情報共有	manaba アンケート	キャリア形成講義Ⅱ	2
5	シチズンシップ	私たちの生活と財政の役割 *6	GD・GW		キャリア形成講義Ⅱ	2
6	将来設計	お金のことってむずかしいの? (消費者教育) *7	GD・GW		キャリア形成講義Ⅱ	2
7	ジェンダー	夫に扶養されて暮らしたいか (性別役割分業) *8	ブレインストーミング	ワールドカフェ	キャリア形成講義Ⅱ	2
8	働くとは	正規・非正規、性差の賃金格差からわかったこと	チームスレッド・情報共有	Word (班ごと提出)	キャリア形成講義Ⅱ	2
9	自己表現	チラシ作成: 好きなモノを宣伝する	個人製作	PowerPoint	基礎演習	1
10	企画・製作	神戸元町商店街イベント企画案を考える *9	チームスレッド・情報共有 GD・GW	応募用紙 (班ごと提出)	キャリア形成講義Ⅱ	2
11	プレゼンテーション力・論理的思考力	「お菓子」とは、定義せよ	GD・GW	Word (班ごと提出)	キャリア形成入門Ⅱ	1
12	社会的構成主義	夏休みの振り返り (他者からの学び)	個人ワーク・GD	Word	キャリア形成入門Ⅱ	1
13	プレゼンテーション力・論理的表現力	世の中のはてな? を解明する Project X	GD・GW	PowerPoint (班ごと提出)	キャリア形成入門Ⅱ	1
14	モチベーション・学習意欲	大学は慣れたか。大学生になった感想	エンカウンター	manaba アンケート	基礎演習	1
15	道具的コンピテンシー	パワーポイントでプレゼンを成功させるための 3 つのポイント *10	チームスレッド	PowerPoint	基礎演習	1
16	労働者	働く人のルール BOOK *11	GD	manaba アンケート	キャリア形成講義Ⅱ	2



図3 チャットツール使用例: 年間給与と賃金格差に関して意見交換しよう



図4 Project X 作成中の意見交換のようす

有効回答数はキャリア形成関連授業前半回答者数 123 名, 後半回答者数 122 名, 合計 245 名であった。授業前半は, 2017 年 10 月 26 日, 授業後半は 2018 年 1 月 12~16 日において, 授業内にて 15 分程度を使用し, manaba course 上で回答を求めた。

4. 調査項目

- (1) 属性: 学年
- (2) キャリア形成基礎力「コンピテンシーに関する質問」
 - ①「自律的コンピテンシー」として, 自律性に関する

11の質問をおこなった。「朝ひとりで起きる」、「朝食をきちんと取る」、「自分の部屋の掃除をする」、「食事を自分で作る」、「自分をふり返る」、「SNSの視聴・閲覧時間を守る」、「計画を立てる」、「意見をはっきり言う」、「できないことは断る」、「マナーを守る」、「何でも最後までやり遂げたい」、の項目に対し、しようと思わない1点、あまりできない2点、助けがあればできる3点、ひとりでできる4点、の4件法から回答を求めた。②「人間関係コンピテンシー」として人間関係力に関する9項目の質問をおこなった。「挨拶をする」、「人を思いやる」、「人と話しをする」、「わからないことを尋ねる」、「人を笑わせる」、「人と協力する」、「人に力を貸す」、「苦手な人とも働ける」、「人と交渉する」の項目に対し、しようと思わない1点、あまりできない2点、助けがあればできる3点、ひとりでできる4点、の4件法から回答を求めた。③「道具活用コンピテンシー」として、道具を使う力に関する10の質問をおこなった。「語彙力がある」、「文章が書ける」、「外国語が使える」、「職業に関する専門知識がある」、「ワープロソフト（MSワード等）が使える」、「表計算ソフト（MSエクセル等）が使える」、「プレゼンソフト（MS PowerPoint等）が使える」、「ワープロソフト（MSワード等）が使える」、「情報検索ができる」、「SNS（LINE、Twitterなど）が使える」、の項目に対し、あまりできない1点、普通にできる2点、かなりできる3点、の3件法から回答を求めた。いずれも、PBL型授業を実施する前後で、また、学年差（1年生、2年生）によって、これらの得点がどの程度変化するかを分析した。

(3)「将来のための学習についての質問」と「キャリア意識」

「将来のための学習についての質問」の項目は、①大学生活において挑戦したい、もしくは挑戦していること、②将来の方向性（業界・領域・分野など）についてどのくらい決めているか、③将来のキャリアのために、現在、取り組んでいること、④職業を選ぶ上で重要視することなどの4つの領域（資料1-2参照）について尋ね、それぞれ回答を得た。

「キャリア意識」を探る質問は、下村ら（2013）によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）を用いた。いずれも、PBL型授業を実施する前後で、また、学年差（1年生、2年生）によって、これらの得点がどの程度変化するかを分析した。CAVT尺度は、人に会ったり、様々な活動に参加したりすることを示す「アクション」（「学外の様々な活動に熱心に取り組む」「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「様々な人々

に出会い人脈をひろげたい」「人生に役立つスキルを身につける」「何ごとにも積極的に取り組む」「様々な視点から物事を見られる人間になる」の6項目）と、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどをいかに明確にしているかを示す「ビジョン」（「将来のビジョンを明確にする」「将来の夢をはっきりさせ目標を立てる」「将来、具体的に何をやりたいかを見つける」「将来に備えて準備する」「将来のことを調べて考える」「自分が本当にやりたいことを見つける」の6項目）から構成されている。回答は、5件法（「5点：かなりできている」～「1点：できていない」）で求めた（質問紙の回答の値は分析時に逆方向に再割当て済）。したがって、得点が高いほど意識が高いことを示す。CAVTは、下村ら（2013）によって、学業成績、エントリーシートの提出数など就職活動量、内定取得数、就職内定先に対する満足感との関連が明らかになっており、妥当性が確認されている（田澤・梅崎、2017）。

(4) eポートフォリオ（manaba course）によるプロジェクト実施後の感想

毎回の講義終了時に、学生の習熟度を確認し、点検するために毎回ミニツッパーパーとして感想を求め、アンケートもプロジェクトごとに実施した。学生の気づきや改善点などの自己評価から、「キャリア形成カルテ」作成に必要な項目を抽出する。

第3章 研究の結果と展開

1. キャリア授業前半と後半の比較

(1) 3つのコンピテンシー（キャリア形成基礎力）の変化

「自律的コンピテンシー」、「人間関係コンピテンシー」、「道具活用コンピテンシー」の各項目に対して、授業前半と後半の平均値の差が統計的に有意かを調べるために、対応のない t 検定をおこなった。その結果、道具活用コンピテンシーのうち「プレゼンテーションソフトが使える」（授業前半 $M=1.73$ 、授業後半 $M=1.89$ ）のみ有意確率.033で有意差がみられた（ t 値 $=-2.147$ 、 $df=243$ 、 $p<.05$ ）。つまり、授業後半のほうが有意に高く、使えると実感している学生が増えていた（図5）。その他の項目に有意差は認められなかったものの、「表計算ソフト（MSワード等）エクセルが使える」（授業前半 $M=1.63$ 、授業後半 $M=1.74$ ）や、人間関係コンピテンシーの「苦手な人とも働く」（授業前半 $M=3.02$ 、授業後半 $M=3.20$ ）、「人を笑わせる」（授業前半 $M=2.96$ 、授業後半 $M=3.07$ ）、などの平均値は微増ではあるが高くなっていることがうかがえた。

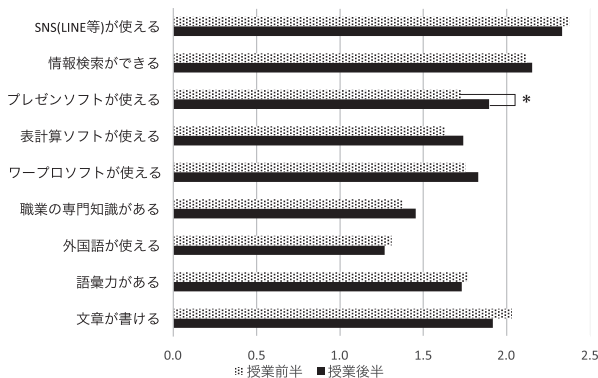


図5 道具活用コンピテンシーの得点変化（平均値）

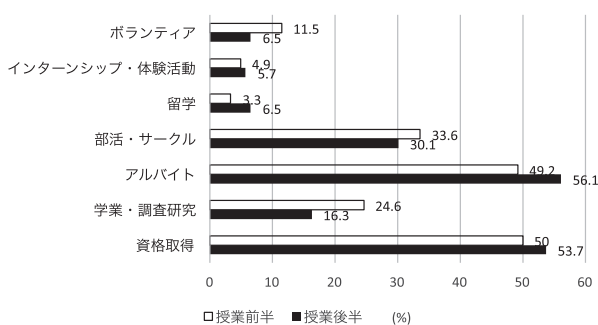


図6 挑戦したい、あるいは挑戦していること（構成比）

(2) 将来のための学習意識とキャリア意識の変化

「大学生活において挑戦したい、もしくは挑戦していることはありますか」の回答（「1. はい」と「2. いいえ」）に対して、前半と後半の平均値の差が統計的に有意かを調べるために対応のない t 検定をおこなったところ、有意差はないことがわかった（ t 値=1.345, df =242, $n.s.$ ）。具体的に、挑戦したい・挑戦している項目（複数回答可）について、授業前半と後半のそれぞれの構成比（%）を算出した結果をグラフに示す（図6）。

図6に示すそれぞれの挑戦項目において、構成比だけを見ると、「ボランティア」「学業・調査研究」の割合が授業後半のほうが低く、「アルバイト」は高かった。

次に「将来の方向性（業界・分野など）について、どのくらい決めていますか」に対して、授業前半と後半の平均値の差が統計的に有意かを調べるために対応のない t 検定をおこなったところ、有意差は見られなかった（ t 値=.081, df =242, $n.s.$ ）。学年から見てもこの時期にまだ決められないのは当然とも言える。

「あなたの将来のキャリアのために、現在、取り組んでいることは何ですか」に対する回答について、授業前半と後半の平均値の差が統計的に有意かを調べるために、対応のない t 検定をおこなった。その結果、「気持ちのよい受け答えやマナーを学ぶ」において有意確率.001で有意差が見られた（ t 値=-3.343, df =242, p <.001）。また「職務遂行に必要なと思われる基礎

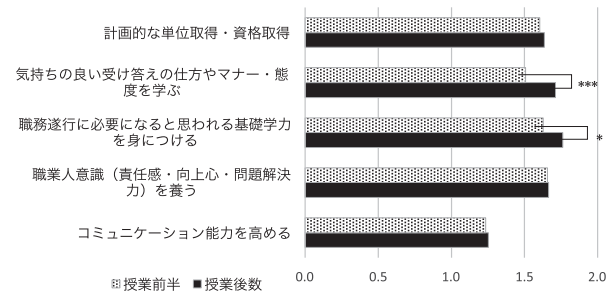


図7 将来のキャリアのために現在取り組んでいることの得点変化（平均値）

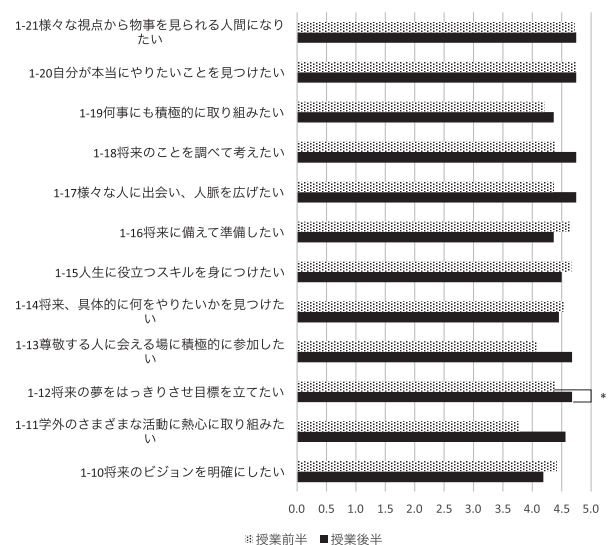


図8 CAVT（キャリア意識）の得点変化（平均値）

学力を身につける」において有意確率.023で有意差が見られた（ t 値=-2.288, df =241, p <.05）（表2）。いずれも、後半のほうが有意に高くなることが示された。つまり、この二つの取組みが、授業後半で増えたことが明らかに示された（図7）。

「キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）」の各項目に対して、授業前半と後半の平均値の差が統計的に有意かを調べるために対応のない t 検定をおこなった。その結果、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどをいかに明確にしているかを示す下位概念「ビジョン」のうち、「将来の夢をはっきりさせ目標を立てたい」（授業前半 M =4.39, 後半 M =4.67）にのみ有意確率.040で有意差が見られた（ t 値=-2.060, df =242, p <.05）。したがって、授業後半のほうが将来への目標についての意識が有意に向上したことが示された（表2）。その他の項目に有意差は認められなかったものの、「尊敬する人に会える場に積極的に参加したい」「学外のさまざまな活動に熱心に取り組みたい」などの平均値の得点は2年生のほうが高いことがうかがえた（図8）。

表2 各コンピテンシーとキャリア意識（授業前半と後半）

項目	授業前半			授業後半		t 値
	平均値 (M)	標準偏差 (SD)		平均値 (M)	標準偏差 (SD)	
職務遂行に必要となると思われる基礎学力を身につける	1.63	.485	<	1.76	.427	-2.288*
気持ちの良い受け答えの仕方やマナー、態度を学ぶ	1.51	.502	<	1.71	.454	-3.343***
キャリア意識 将来の夢をはっきりさせ目標を立てたい	4.39	.868	<	4.59	.600	-2.060*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表3 各コンピテンシーとキャリア意識（学年）

項目	1 年生			2 年生		t 値
	平均値 (M)	標準偏差 (SD)		平均値 (M)	標準偏差 (SD)	
困難なことも集中して取り組む	3.13	.784	<	3.38	.770	-2.480*
朝ひとりで起きる	3.50	.841	<	3.76	.594	-2.863**
挨拶をする	3.87	.434	>	3.69	.779	2.083*
キャリア意識 将来のことを調べて考えたい	4.36	.735	<	4.55	.704	-2.082*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

2. 1 年生と 2 年生の比較

(1) 3 つのコンピテンシー（キャリア形成基礎力）の変化

「自律的コンピテンシー」の各項目に対して、1 年生（137 名）と 2 年生（108 名）の平均値に差が認められるかを調べるために、対応のない t 検定をおこなった。その結果、「困難な事も集中して取り組む」（1 年生 $M=3.13$, 2 年生 $M=3.38$ ）において、有意確率 .014 で有意差が見られた（ t 値 = -2.480, $df=243$, $p<.05$ ）。また、「朝ひとりで起きる」（1 年生 $M=3.50$, 2 年生 $M=3.76$ ）において、有意確率 .006 で有意差が見られた（ t 値 = -2.751, $df=243$, $p<.01$ ）。この 2 項目に対して、2 年生が有意に高いことが示された（表 3）。以上の結果を図 9 に示す。

「人間関係コンピテンシー」の各項目に対して、1 年生（137 名）と 2 年生（108 名）の平均値に有意な差が認められるかを調べるために対応のない t 検定をおこなった。その結果、「挨拶をする」（1 年生 $M=3.87$, 2 年生 $M=3.69$ ）においてのみ、有意確率 .028 で平均値の差が有意（ t 値 = 2.083, $df=243$, $p<.05$ ）であることがわかり（表 3）、2 年生は 1 年生よりも挨拶する人の割合が低いことが示唆された（図 10）。

「道具活用コンピテンシー」の各項目に対して、1 年生（137 名）と 2 年生（108 名）の平均値に有意な差があるかを調べるために、対応のある t 検定をおこなった。その結果、いずれの項目に対しても有意な差は認められなかった。

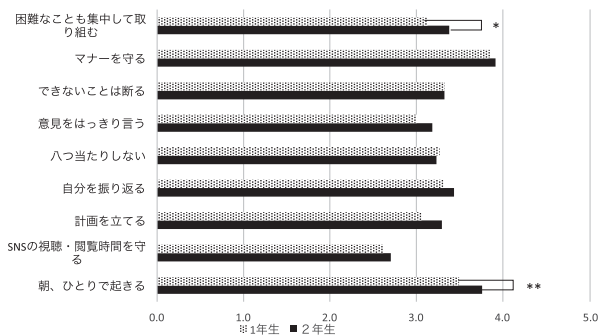


図9 自律的コンピテンシーの得点変化（平均値）

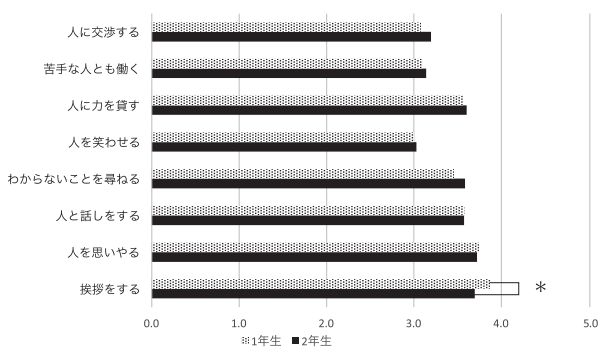


図10 人間関係コンピテンシーの得点変化（平均値）

(2) 将来のための学習意識とキャリア意識の変化

「現在、大学生活において挑戦したい、もしくは挑戦していることはありますか」の回答（「1. はい」と「2. いいえ」）について、1 年生と 2 年生の平均値の差が統計的に有意かを確かめるために対応のない t 検定をおこなった結果（1 年生 $M=1.15$, 2 年生 $M=1.10$ ）、有意差はなかった（ t 値 = 1.003, $df=242$, $n.s.$ ）。有意差はないものの、すべての項目に対して「はい」と答えた学生

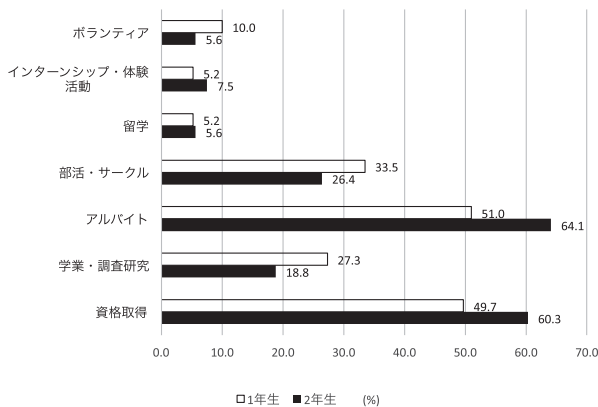


図11 「挑戦したいこと、挑戦している」と回答した学生の項目ごとの割合（複数回答可）

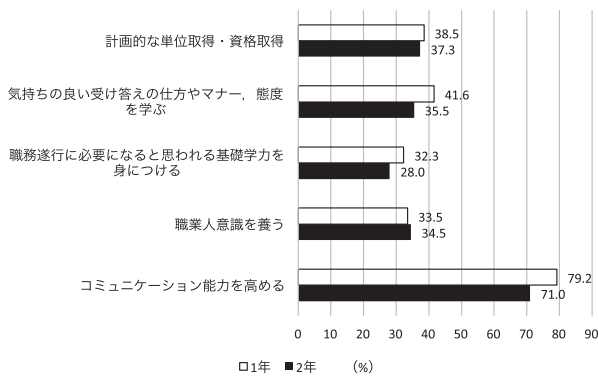


図12 「将来のために取り組んでいる」と回答した学生の項目ごとの割合（複数回答可）

数を学年ごとの総数（1年生137名、2年生107名）のうちの有効回答者数で割って、各学年の割合を比較したところ、2年生において「資格取得」「アルバイト」の回答比率が多かったが、一方で「学業・調査研究」は低くなっていることが見て取れた（図11）。

次に、「あなたの将来のキャリアのために、現在、取り組んでいることは何ですか」（複数回答可）について、1年生と2年生の平均値の差が統計的に有意かを確かめるために、それぞれの項目に対して対応のない t 検定をおこなった。その結果、どの項目にも有意差は見られなかった。有意差はないものの、すべての項目に対して「取り組んでいる」と答えた学生数を学年ごとの総数（1年生137名、2年生107名）のうちの各有効回答者数で割って、各学年の割合を比較したところ、「職業人意識（責任感・向上心・課題解決能力）を養う」の項目以外は、1年生のほうが高いことがうかがえた。また、「コミュニケーション能力を高める」「気持ちの良い受け答えの仕方やマナー、態度を学ぶ」などについては2年生の取り組みの割合が下がっていたことがうかがえた（図12）。

次に、「キャリア意識の発達に関する効果測定テスト

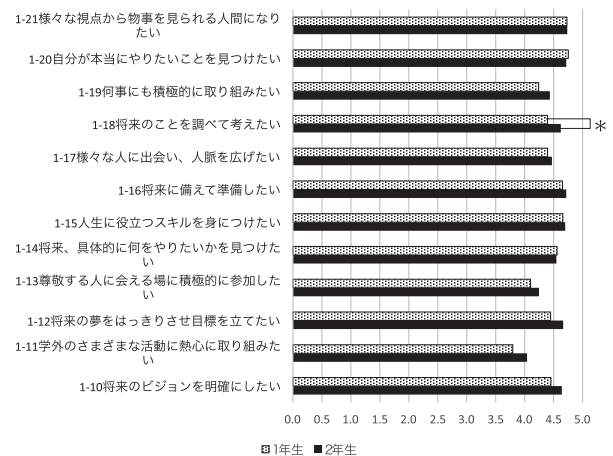


図13 CAVT（キャリア意識）の得点変化（平均値）

（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）」に関する12項目について、1年生と2年生平均値の差が統計的に有意かを調べるために対応のない t 検定をおこなった。平均値の得点が高いほど、項目が示す意識傾向が強いことを示す。その結果、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどをいかに明確にしているかを示す下位概念「ビジョン」のうち、「将来のことを調べて考えたい」（1年生 $M=4.36$ 、2年生 $M=4.55$ ）にのみ、有意確率.038で平均値の差が有意であることが示され（ t 値 $=-2.082$, $df=242$, $p<.05$ ）、2年生のほうが平均値が高いことが示された（表3）。すなわち、2年生になると将来を意識し始めていることがわかった（図13）。

3. ミニツペーパー（学習成果）とmanaba courseに関するアンケートの集計（一部）

筆者はこれまで、PBL型学習という真正性の高い問題をグループで取り組む自己主導学習を通して、多様なコンテンツを導入してきた。そのすべてのコンテンツにおいて、学生の習熟度を確認し、点検するためにミニツペーパー（学習の振り返り用紙）を回収した。また、今回はじめて導入したmanaba courseに関するアンケートを行い、間接評価（自分が何を理解したか、何ができるようになったと思うか）から、代表的な回答を以下に記す。

(1) 労働環境、ブラックバイト、労働法

・私のバイト先ではラストの閉店作業を全部バイトひとりに任せられます。金庫のお金を数えるのもすべてバイトひとりです。そこは、誰か社員さんなり店長さんがやらなければならないのでは、と感じました。

・バイトなんていくらでもあるのだから嫌なら辞めたらいいと考えています。学生の場合は学業が本業なので、そこを第一に考えるべきだと思います。自分の気に入らないところがあっても、すぐにブラックだと言わないことも大切だと思います。

・私はブラックバイトに当たったことはないが、当たった際に困らないように知識はつけておきたいと思った。また、学生側もアルバイトをする際は、店のことも考え良識のある行動をとり店との良い関係を築くことがブラックバイト予防にもつながると考えた。

・私のところも給料明細があやふやなつけ方をされていたりするので、気を付けようと思いました。

・グループの人の話を聞いていたら、夜中に呼び出されてバイトに行かないといけな人がいたり、仕事内容のわりに時給が低かったりと色々問題があるんだなと思いました。ブラックバイトだと分かっているけど、そのバイトを辞めたり、問題点を言ったりすることはなかなか難しいと思うけど、ちゃんとした法律もあるので言う権利があるなと思いました。もし自分のバイトがブラックだなと思ったら、しっかりと自分の意思を持って、きちんと解決する努力をしたいなと思いました。

以上の回答から、学生はアルバイトを通して働き方を客観視し、労働環境と労働者の権利を理解しながら、自覚と責任を持った働き方を学び取っていると思われる。辞める勇気・逃げずに問題解決を試みる勇気などの対応を判断していた。

(2) プレゼンテーションソフトの活用とプレゼンテーション力

・今日色々な人の紹介を見て思ったことは、いっぱい文字があるより写真を一枚出してそれについて解説していくほうが僕はわかりやすくいいと思った。つぎにプレゼンするときはシンプルだけど内容のしっかりついた濃いものにしようと思った。みんなのプレゼンを見て自分の興味のなかった分野に少し興味をもてるようになったので良かった。

・みんな本当にクオリティが高いと感じた。また、私の場合、事前に喋ることを下書きして、それを見ながらプレゼンをするときは喋っていたのだが、ほとんどの人は何も見ずに語っていたのすごいなと思った。あとは感想として、全体的にボディランゲージが少ないのと、アイコンタクトが少ないと感じた。私も改めて自分の発表を直したいところがたくさんある。これからは今回のプレゼンを活かしてもっとよりよいものにしていきたい。

・自分にはたくさん改善する余地があると感じました。またPPの使い方は授業で習っていますがもう一度復習して、今回の自分の発表がよくなるように工夫できることはないかと探したいと思いました。前に立って人前で話す機会もたくさんできてきているので、そろそろ慣れていきたいと思いました。

・先週、今日と他の人のプレゼンを聞いてずっと自分のプレゼンをやり直したいと思っていました。特に今日はスライド作りがかなりうまい人が多くてより一層そう思いました。表や根拠のようなものを挙げてわかりやすくするといったことや、スライドの効果を使ってインパクトを出すということなどは非

常に参考になったので、またこういった機会があれば今日学んだことを存分に生かしたいです。

・マイクを持つとどれくらいの声量で話せばいいかわからず、ハキハキ話せなかったこと。話のまとめがうまくいかなかったこと。この二つが今回の発表で見つけた改善点だ。

・好きなことのプレゼンだとスラスラとストレスなくパワーポイントを作れたので、これからあるであろうプレゼンでは気持ちを楽しい方向へもってやって作ろうと思った。

・家で、パソコンをひらきながら、何度も練習しました。発表すると決まった日から、今日の発表が終わるまでずっと緊張していて、やはり前に立って発表している最中もとても緊張していました。無時に発表し終わることができて、とてもほっとしています。

・前回、僕は休んでしまったので、前日に発表した人のプレゼンテーションが聞けなくて残念でした。プレゼンテーションというものは、大学に入るまでやったことがなく、僕は下手なのでこれから頑張っていきたいと思います。

・自分の語彙力のなさが痛感されてうまく伝えることができなかったことが反省点でした。

以上のように、課題に対する計画・実行・分析・改善のサイクルにしたがって、プレゼンテーション力をどのように向上していくべきか客観視できている学生が大半を占めた。実際に行うこと、そして他者からも学べるコンテンツを活用したPBL型学習は、成長のためのヒントをつかめる貴重な学習プログラムであることがうかがえる。

(3) 正規・非正規社員の賃金格差について

・私たちの班では、多数の意見が出たが、1つ目としてはニートは社会における社会的損出であると思うという意見があった。フリーターというのは、実際に正社員としては働いていないが、バイトやパートとして働いている。2つ目は、男女平等と今の社会で出ているが、まだ男女平等の格差があまりにもありすぎるという意見が出た。今の法律で男女機会均等法や男女共同参画社会基本法など平等に向けて目指しているが、まだ雇用の割合、給料の金額など平等ではないものが多いと思う。今、与党の会議や国会でいろいろ話されているが、最近そのことを全く聞かない気がする。私たちは、今変わらないといけないのは男女平等についてだと思う。実際に私は姉がおり就職活動の様子を見ていたが、知り合いの男性はすぐ決まっていたが、私の姉は結構な数の企業から断られ、1社だけ内定をもらえた。企業の募集要項を見ても、男女の採用比率がおかしすぎると思う。僕の考えがおかしいのかもしれないが、女性の働き場所をもっと増やしたほうがいいと思った。3つ目は、大卒や短大卒などいるが、就職し始めは給料にそんな差がないが、年を重ねるうちに金額の差が出てきているという意見が出た。実際に資料を見ても数円の差しかないが、30代、40代と年を

重ねるうちにもらえる給料の金額の差が広がっている。将来結婚し子どもができたとしたらやはり大学に行き、就職したほうがいいと思った。将来の子どもにも大学に行かせ裕福な家庭をきつてもらいたいという声もあった。まとめとして、まずは働くという結論に至った。

前出の「社会的損失」を補足すると、納税者の減少を意図するものであり、学生達に人格否定の意図があったわけではないことを書き添えておく。国民一人一人の納税により社会基盤が作られていることの認識ができている結果と考える。また、働く意味や人生を生き抜くための今後のライフプランに繋げることができた。

(4) 大学受験の国際比較から気づいたこと、大学入学目的の変化

- ・日本は入学するまでが難しく受験戦争が激化している。しかし、海外（アメリカ等）に比べると、入ってからの生活は割と平穏なもの。大学生活の中で何を学ぶかが重要である。

- ・自分たちの班ではアメリカと日本の受験制度の違いについて改めて確認しました。日本での受験制度が前回の授業で見たグラフ（大学入学目的の変化）に影響しているのであれば、日本の受験制度は見直すべき点があるのではないかという意見が出ました。しかし、アメリカの制度ならば、入学後に厳しいカリキュラムが待っているの、日本でよかったと思っているのが現状です。それぞれの国に適した受験制度があると思うので、ほかの国の制度を参考にして日本に適した制度を作ってほしいと思いました。

- ・総合的には、アメリカの大学受験制度のほうが、大変そうという意見が目立った。アメリカでは、高校での授業態度や、学習成績が大学受験に大きく反映されることから、高校生活の早い段階から、明確な目標や高い意識を持つことが必要とされる。そのため、優秀な人材が育ちやすい一方で、意識が低い、途中で挫折する学生は優秀な学生から、置いて行かれるといった二極化が強まりそうである。アジアでの大学受験は、受験生にとって、その先の将来を左右する人生の一大イベントといっても過言ではないほどの扱いをされているため、中国の国を挙げての協力体制には大学受験の価値の高さがあらわれている。

- ・自分は日本の大学受験がいいと思っていたが、（他のメンバーは）「入学してからが大事ということでアメリカはいいと思う」などの色々な意見があった。人それぞれ意見があり、なるほどと思う意見もいくつかあった。

国ごとの受験制度の認識において、さまざまな価値観や考え方、そして学びに向かう姿勢があることを集団討論から気づいたことが見て取れる。最終的に、「何のために学ぶか」「何ができるようになるか」を意識して学修生活を計画できるようにするために実施した学習プログラムの一つとなった。

(5) manaba course を使用した感想

- ・情報共有がすばやくできて、協力したら凄く早く仕上げることができた。とても便利で、画期的なシステムだと思いました。

- ・チャットや相互閲覧などで他の人の意見が聞けたのはすごく良かった。自分ひとりだけでは、こんなレポートができなかった。私と反対の考え方や価値観を取り入れるほうが得だということがわかりました。

- ・みんなのレポートを閲覧させてもらえてとても参考になった。これではいけない、と思い何度も修正して提出しなおした。お陰でライティングのスキルが上がったと思う。

- ・作ったものやポートフォリオが残せるので、助かりました。来年も使います。

- ・チャットは意見が言いにくい人はやりやすいのかもしれないが、目の前にいるのに、もっと直接顔を見てしゃべりたかった。

- ・いちいちホームページを検索してログインするのがめんどくさかった。ID/PW もすぐに忘れてしまいました。

- ・課題が提出しやすい。すぐに検索もできてしらべモノもしやすい。動画も使えるし、先生からも資料がすぐにアップされるので便利だと思った。でも直接紙で見たいときもあった。

- ・最初はパソコンが苦手で手間取ってしまってかなり焦った。慣れてからは、チャットがおもしろかった。

- ・マナバのお陰でみんなで意見を出し合って、物事を決めていけることにとても自信になった。ありがとうございました。

情報共有の簡便さ、素早さ、省資源化、持ち歩かなくてすむ利便性に関しては好評だった。また、多様な主張と議論の発展から、自分には無かった価値観を取り入れ、自己反省し成長する姿勢が確認できた。会議でのコミュニケーション活性化支援を検討した平光・白井・杉山（2003）の研究によると、チャットによる「発言」は、その抵抗を軽減し、参加者からは「代弁の場」「対等な場」として期待が認められ、チャットを会議のコミュニケーション活性化の主軸として利用できること報告している。現代の若者は、スマートフォンに精通していることもあって、利用により対人関係が進むのではと期待していたが、face to face のコミュニケーション力の向上に繋げるには、manaba course システムに偏ったプロジェクトにならぬよう、カリキュラムの構成を改める必要があることもわかった。

以上の学生評価から、メタ認知の有効性は示唆され、e ポートフォリオ（manaba course）を活用したキャリア形成学習プログラムの開発のための学習支援カリキュラムは一定の進展を見せた。

第4章 研究の考察

本研究では、筆者の1年生ゼミ生、及び1・2年生のキャリア形成関連講義受講者を対象に、eポートフォリオを活用したキャリア形成の効果に焦点を当てた学習プログラムを構築すること、そして、学生のあらゆる進路選択を対象としたキャリア形成カルテを活用しながら、学びの記録と成長の可視化を促すことにより社会的・職業的自立を目的とした。方法としては、授業の前半と後半、そして1年生と2年生の変化を追ひ、キャリア形成基礎力である「人間関係コンピテンシー」、「自律的コンピテンシー」、「道具活用コンピテンシー」の3つのコンピテンシーの変化と、将来のキャリア形成のための学習意欲とキャリア意識の変化を分析することで、実践的にキャリア教育の評価をおこなった。

1. キャリア形成基礎力（3つのコンピテンシー）

キャリア形成関連講義の前半と後半を比較し、統計的に有意に認められたのは、道具活用コンピテンシーの「プレゼンテーションソフトが使える」であった。授業後のミニツツペーパーには、難しさとともに改善点を前向きに述べ次に活かす意欲が感じられた。学年差を見ても、2年生は自信を深めていることがうかがえた。自律的コンピテンシーにおいては、「困難なことでも集中して取り組む」「朝ひとりで起きる」については、2年生のほうが有意に高いことが示され、集中力が向上した自覚や、自己を管理することに慣れてきた様子が見られた。しかし、人間関係コンピテンシーの項目である「挨拶をする」は、2年生のほうが有意に得点が低いことが示された。「挨拶をする」ことを2年生のほうが、しないと自認している。中等教育からの移行がまだ浅い初年次に比べて、大学は挨拶をしなくても済む環境なのかもしれない。高次学年に移行する過程の変化を追う必要がある。

2. 将来のための学習意識とキャリア意識

「将来のキャリアのために取り組んでいること」の質問に対して、授業前半と後半を比較した結果、「職務遂行に必要なと思われる基礎学力」と「気持ちの良い受け答えの仕方やマナー、態度を学ぶ」について有意に高いことが明らかになった。授業前半の時点よりも後半のほうが、基礎学力の重要性やマナーや態度への取り組みに対する認識が向上し、教養をさらに身につけてはいけないという意識が高まったといえる。1年生と2年生の比較では、どの項目にも有意差は認められなかった

が、現在取り組んでいると回答した学生の割合を比較したところ、「職業人意識（責任感・向上心・課題解決能力）を養う」の項目以外は、1年生のほうがすべて高いことがうかがえた。2年生は、大学生活にも慣れ、日常生活が乱れはじめる時期とも言える。上田・恒吉（2013）は、1年生から4年生にかけて学生の学習意欲の変化を調査した結果、意欲が一度下がり、その後上がるというU型曲線の出現頻度が最も高いことを報告している。学業以外で活動が増える1年生の後期から下がり始め、クラブなどを引退する3年生後期に、卒業や就職にむけて上昇することを明らかにしている。また、1960年から1970年代にかけて、欧米で研究されたスチューデント・アパシー（大学生の無気力）に言及すれば、Walters（1961）によると、それは2年生に起きやすいと示唆している。さらに、丸井（1968）は、留年の類型化を研究するなかで「みずからも明らかにこえられないような空虚感や無感動」を示す一群の留年者が見られることを指摘していた。このような事態を招かぬためにも、eポートフォリオを活用した大学生の形成学習プログラムの開発は必要であり、今後も評価・点検を継続していくことは必須である。

「大学生活で挑戦したい、あるいは挑戦していること」の取組みについて、授業前半・後半、学年間による有意な差は共に認められなかった。取り組んでいると答えた学年の構成比をみると、「資格取得」については、学年に関わらずほぼ5割以上の学生が取り組んでおり、資格に対する意識の高さがあらためて明らかになった。「学業・調査研究」に取り組んでいると回答した2年生のほうが1年生よりも少ないことが、ここからも見て取れる。

キャリア意識（CAVT）を尋ねた項目では、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどをいかに明確にしているかを示す下位概念「ビジョン」では、質問にとりあげた6項目のうち、「将来のことを調べて考えたい」の平均得点が、2年生の方が1年生よりも有意に高いことが示された。つまり、基礎学力向上のための努力などを避けがちな2年生ではあるが、将来にむけて主体的に行動する必要性は感じている表れではないかと考察する。内心では早く夢を見つけないかと願いが推察できる。また、「将来の夢をはっきりさせ目標を立てたい」が、授業後半では有意に高かったことが示された。授業との因果関係は今回測定していないが、社会的・職業的自立に向けた態度を育むキャリア発達を促す教育の一定の成果が認められた。キャリア意識に関しては学年間の定量的分析の結果から俯瞰すると、2年生のほうが将来に対するビジョンが高い傾向にあった。ただ、昨今の就職活動

の早期化が目立つ就活事情において、2年生は就職活動の重要性を自覚し始めていることも分析結果から推察できた。そもそもキャリア教育とは、1セメスターだけでなく、発達の段階に応じ体系的に数年かけて実施するものである。経過を見て行く課題に加えて、上位学年を対象にする必要がある。

3. キャリア形成カルテの作成

以上のように明らかになった教育課題に対応するため、2年生の学習意欲の低下を防止するためにも、ポートフォリオの機能を兼ねた「キャリア形成カルテ」を開発し、知識の活用や新たな知識の創造に向けての学習計画をサポートし、未来のキャリアを意欲的かつ柔軟に管理できる支援ツールが必要である。「ふり返り」によって、自分自身の学習のあり方を客観視することは、さらにメタ認知を高める (Gardner・Boix-Mansilla, 1994)。そこで、学生が職業を探索し、キャリアガイダンス等により得た自身の特性やスキルを一元化していける「キャリア形成カルテ」の案を作成した (巻末添付資料2)。分析結果から示されたように、基礎学力の可視化、計画的な単位や資格取得、そして総合的な能力発見を基本とするたたき台になった。将来的には、学生主導型学習の機会を増し、自身の学習の成果を電子上に残していくeポートフォリオとして対応させた総合的なキャリア形成カルテ、つまり文部科学省 (2018) が示すeポートフォリオ「キャリア・パスポート (仮称)」をたたき台として開発する必要があると考える。学生自身が活動を記録、蓄積し、成果等を活用することで、4年間の教育効果を向上させることができ、さらに就職活動や卒業後の転職時にも活かせることが可能なキャリア形成カルテの更なる検討が期待される。

4. キャリア形成学習プログラムの開発

表1に示したmanaba course上で行ったPBL型授業の一例に示した通り、本研究ではクラウド型教育支援システムでの学習に特化したプログラムの開発研究であった。学習プログラムの一環として行ったPBL型授業の前半と後半を比較するとコンピテンシーとキャリア意識が向上することが有意に認められた。本システムの有無にかかわらず、通常の教室において、教員のキャリアにかかわらず平準化しておこなえるようカリキュラム化していくことが重要であろう。

5. 今後の課題

最後に本研究の問題点と今後の課題を述べる。第1に、本研究の最大の問題点は、短期間の研究のため、3

つのコンピテンシーの向上と将来のキャリア形成のための学習意欲の長期的な変化を測定できていない点にある。講義の前半と後半、あるいは学年対象が1年生と2年生の下位学年のデータでは、学習成果や成長を比較するには近すぎた。今後は、上位学年にまで対象を広げ、また性別ごとに、大学4年間を対象にした調査研究をおこなっていく必要がある。第2に、どのような因子がコンピテンシーやキャリア意識に影響を与えるのかなど、その因果関係を明らかにできていないことである。キャリア意識を形成する基盤的な能力として、コンピテンシーを位置づけ、それぞれのコンピテンシーがどのようなキャリア意識と関連するかを考察するためには、キャリア意識の構成概念を明確にする必要がある。第3に、eポートフォリオを活用したキャリア形成学習プログラムは、学生の学習に効果があることがその回答から明らかであるし、レポートの作成やPBL型学習の質的調査からも効果がみられた。しかし、さらに近年求められている自己評価システムとして、ルーブリックシステムを組み込んだ学生の自己評価システムと対応させる必要がある。第4に、ポートフォリオの一種として考案した「キャリア形成カルテ」は、学びを促進し、教育効果を促進するには未だ内容が薄く、アウトカムを可視化するには不十分である。さらに試験的導入を試みながら、学生から社会人への移行と定着に大きな支援効果をもたらすような構成が必要である。

eポートフォリオによる学習プログラムの実施は、大学教育効果を高める有効なツールの一つである。さらに改善を重ねて完成させた後には学部不留まらず全学的に導入し、大学生の長期的な発達に寄与できるよう実用化を目指したい。

付 記

本稿は、2017年度人文学部研究推進費の採択を受けた同名タイトル (研究者は筆者と立田慶裕教授) の内容を大幅に加筆修正したものである。

引用・参考文献

- Biggs, J., & Tang C. (2011) "Teaching for quality learning at university", fourth edition, *The Society for Research into Higher Education*.
- 中央教育審議会 (1996) 21世紀を展望した我が国の教育のあり方について (第一次答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309634.htm
<http://www.monbu.go.jp/>
- 中央教育審議会 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)
- Gardner, H., & Boix-Mansilla, V. (1994). Teaching for

- understanding-within and across the disciplines. *Educational Leadership*, 51 (5), 14-18.
- 平光節子・白井正博・杉山岳弘 (2003) チャットをベースにした会議のコミュニケーション活性化システムの検討. 情報処理学会研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI), 94 (2003-HI-105), 7-12.
- 河野麻沙美 (2016) 教員養成課程におけるアクティブラーニングの課題と展望: 21 世紀型の学びを創出する教師の育成に向けて. 上越教育大学研究紀要, 35, 43-55.
- 丸井文男 (1968) 留年学生に対する対策 厚生補導 22, 18-24.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討ー正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示すー 京都大学高等教育研究, 15, 107-118
- 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2018) キャリア教育リーフレット特別編 キャリア・パスポートって何だろう?
- Reardon R. C., Lumsden, J. A., & Neyer K. E. (2005) Developing an e-portfolio program: Providing a comprehensive tool for student development, reflection, and integration. *NASPA Journal*, 42 (3), 368-380.
- Rychen, D. S., & Salganik, L. H. (Eds.) (2003) Key competencies for a successful life and a well-functioning society, *Gettingen, Germany*: Hogrefe & Huber D. (D. S. ライチェン他著『キー・コンピテンシー』立田慶裕監訳 明石書店, 2006)
- 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 (2013) 「キャリア意識の測定テスト (CAVT) の開発」梅崎修・田澤実編著『大学生の学びとキャリアー入学前から卒業後までの継続調査の分析』法政大学出版局, pp.127-139.
- 田澤実・梅崎修 (2017) キャリア意識と時間的展望ー全国の就職活動生を対象にした自由記述分析ー キャリア教育研究, 35-47
- 立田慶裕 (2011) e ポートフォリオの目的と種類 文部科学教育通信 ジアース教育新社, 276, 22-23
- 立田慶裕 (2014) キー・コンピテンシーの実践 明石書店, p.32
- 立田慶裕 (2018) e ポートフォリオを活用した教育方法論の開発研究 2017 年度教育改革助成金研究成果報告書
- 上田佳苗・恒吉徹三 (2013) 大学生の学業意欲の変化について 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 36, 115-123
- Van Harmelen, M. (2008) Design trajectories: four experiments in PLE implementation. *Interactive Learning Environments*, 16 (1), 35-46.
- Walters, P. A. J. S. (1961) Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C. C. (ed) Emotional Problem of the Student Appleton-Century-Crofts. (笠原嘉, 岡本重慶 (訳) 学生のアパシー, 石井完一郎他 (監訳) 学生的情緒問題 文光堂, 1975)
- 山田剛史・溝上慎一 (2018) 〈Ⅳ〉教育アセスメント 京都大学高等教育研究開発推進センター活動報告, 2017, 31-32
- 湯浅且敏・大島純・大島律子 (2010) PBL デザインの特徴とその効果の検討 静岡大学情報学研究, 16, 15-22.
- 使用教材 (WEB・書籍): 2018 年 10 月 14 日確認**
- *1 【TED】 内的動機づけの大切さ ダニエル・ピンク
<https://www.youtube.com/channel/UCAuUUnT6oDeKwE6v1NGQxug>
- *2 【TED】 質の高いコミュニケーションをとるための 10 の方法
セレステ・ヘッドリー at TED×Creative Coast 上手に会話する 10 の方法
<https://www.youtube.com/channel/UCAuUUnT6oDeKwE6v1NGQxug>
- *3 大学入試の国際比較: 大和総研ビジネスイノベーション 2008
<https://www.dir.co.jp/report/column/080123.html>
- *4 大学入学目的の変化 (大学生調査 25 年) 大学入学目的 25 年の変化を追う
片桐新自 (2014) 不透明社会の中の若者たち 関西大学出版部
- *5 大学時代にやっておくべき 10 のこと Kindle 版
はあちゅう, 霜田明寛 (編)
- *6 私たちの生活と財政の役割 なぜ税を納めなければならないのだろう: 国税庁
<https://www.nta.go.jp/taxes/kids/kyozai/index.htm>
- *7 お金のことってむずかしい?! みらい予想図 ライフプランの必要性
全国日本銀行協会「金融リテラシーブックシリーズ」
<https://www.zenginkyo.or.jp/article/tag-a/7947/>
- *8 夫に扶養されて暮らしたいか
「結婚したら夫に扶養されたい」発言小町トピ&レス
<https://www.yomiuri.co.jp/komachiplus/kuragetlogy/20171003-OYT8T50149.html>
- *9 神戸元町商店街へのイベント企画案応募 (班活動)
https://www.kobe-motomachi.or.jp/information/2017/11/03/event_boshu_201711.pdf
神戸元町商店街連合会
- *10 パワーポイントでプレゼンを成功させるための 3 つのポイント
<https://liginc.co.jp/life/useful-info/35301>
- *11 働くルール BOOK 大阪府総合労働事務所 相談課
<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/19972/00000000/omote.pdf>
<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/19972/00000000/ura.pdf>

資料 1-1 (アンケート調査)

1. 自律性に関する質問

	ない と思う	あまり できない	助け られる が	ひとり ででき る
朝、ひとりで起きる	1	2	3	4
朝食をきちんと取る	1	2	3	4
自分の部屋の掃除をする	1	2	3	4
食事を自分で作る	1	2	3	4
自分をふり返る	1	2	3	4
テレビの視聴時間を守る	1	2	3	4
計画を立てる	1	2	3	4
意見をはっきり言う	1	2	3	4
できないことは断る	1	2	3	4
マナーを守る	1	2	3	4
何でも最後までやり遂げたい	1	2	3	4

2. 人間関係力に関する質問

	ない と思う	あまり できない	助け られる が	ひとり ででき る
挨拶をする	1	2	3	4
人を思いやる	1	2	3	4
人と話しをする	1	2	3	4
わからないことを尋ねる	1	2	3	4
人を笑わせる	1	2	3	4
人と協力する	1	2	3	4
人に力を貸す	1	2	3	4
苦手な人とも働ける	1	2	3	4
人と交渉する	1	2	3	4

3. 道具を使う力に関する質問

	あまりできない	普通にできる	かなりできる
言葉の力がある	1	2	3
文章を書ける	1	2	3
外国語が使える	1	2	3
職業に関する専門知識がある	1	2	3
ワープロソフト (MSワード等) が使える	1	2	3
表計算ソフト (MSエクセル等) が使える	1	2	3
プレゼンソフト (MS powerpoint等) が使える	1	2	3
情報検索ができる	1	2	3
SNS (LINE, Twitterなど) が使える	1	2	3

資料 1-2 (アンケート調査)

将来のための学習について

質問 1 現在、大学生活において挑戦したい、もしくは挑戦していることはありますか。

- 1. はい
- 2. いいえ

問 1 で、「はい」と答えた方にお聞きします。

次のうち、その目標に近い 活動に○をつけてください

- 1. 資格取得
- 2. 学業・調査研究
- 3. アルバイト
- 4. 部活・サークル
- 5. 留学
- 6. インターンシップ・体験活動
- 7. ボランティア
- 8. その他()

質問2 将来の方向性(業界・領域・分野など)について、どのくらい決めていますか。

- 1. 明確に決めている
- 2. ある程度決めている
- 3. ほとんど決めていない
- 4. まったく白紙である

質問3 あなたの将来のキャリアのために、現在、取り組んでいることは何ですか。

- 1. コミュニケーション能力を高める
- 2. 職業人意識(責任感・向上心・課題解決能力など)を養う
- 3. 職務遂行に必要なと思われる基礎学力を身につける
- 4. 気持ちの良い受け答えの仕方やマナー、態度を学ぶ
- 5. 計画的な単位取得・資格取得
- 6. その他()

質問4 職業を選ぶ上で、重要視することを次の中から、1つ選んでください。

- 1. 給料
- 2. やりがい
- 3. 勤務時間
- 4. 福利厚生
- 5. 勤務地
- 6. 業務内容
- 7. 人間関係
- 8. 将来性
- 9. その他()

質問5 あなたの将来についてお聞きします。以下の質問に1「そう思う」、2「まあまあ思う」、3「どちらでもない」、4「あまり思わない」、5「そう思わない」、から番号を選んで教えてください。

	1 そう 思う	2 ま あ ま あ 思 う	3 ど ち ら で も な い	4 あ ま り 思 わ な い	5 そ う 思 わ な い
(1) 将来のビジョンを明確にしたい。	1	2	3	4	5
(2) 学外の様々な活動に熱心に取り組みたい。	1	2	3	4	5
(3) 将来の夢をはっきりさせ目標を立てたい。	1	2	3	4	5
(4) 尊敬する人に会える場に積極的に参加したい。	1	2	3	4	5
(5) 将来、具体的に何をやりたいかを見つけない。	1	2	3	4	5
(6) 人生に役立つスキルを身に付けたい。	1	2	3	4	5
(7) 将来に備えて準備したい。	1	2	3	4	5
(8) 様々な人に出会い人脈を広げたい。	1	2	3	4	5
(9) 将来のことを調べて考えたい。	1	2	3	4	5
(10) 何事にも積極的に取り組みたい。	1	2	3	4	5
(11) 自分が本当にやりたいことを見つけない。	1	2	3	4	5
(12) 様々な視点から物事を見られる人間になりたい。	1	2	3	4	5

資料2 (キャリア形成カルテ)

キャリア形成カルテ

NO.

氏名

作成年月日 年 月 日

①習得をめざす教科の単位数

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	必修単位数
専門教育科目					
キャリア形成科目					
共通教育科目					
教職に関する科目					
教科に関する科目					
博物館学芸員課程科目					
取得単位数 合計					

②スキルアップ

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	取得(修了) 年月日
TOEIC					
公務員講座					
SPI					
漢字検定					
英語検定					
行政書士					
宅地建物取引士					
ファイナンシャル・プランニング 技能検定 (2級)					
ファイナンシャル・プランニング 技能検定 (3級)					
簿記検定講座(2級)					
簿記検定講座(3級)					
二種外務員					
リテールマーケティング(販売士)検定(3級)					
色彩検定 [®] (2級)					
秘書検定(2級)					
秘書検定(準1級)					
サービス接遇検定(2級・準1級)					
Microsoft Office Specialist (MOS) Word 2013 Specialist					
Microsoft Office Specialist (MOS) Excel 2013 Specialist					
Microsoft Office Specialist (MOS) Access 2013					
ITパスポート					
国内旅行業務取扱管理者					
総合旅行業務取扱管理者					
TOEIC [®]					
貿易実務検定 [®] (C級)					
介護職員初任者研修					
医科医療事務 (3級)					
福祉住環境コーディネーター検定試験 [®]					
法学検定 (基礎・中級・上級)					
受講数 合計					

③私のキャリアデザイン(活動記録)

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	将来に生かせること
学生団体・サークル					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
ボランティア					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
留学・語学研修					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
フィールドトリップ					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
キャリアガイダンス (キャリアセンター)					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
キャリアカウンセリング					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
インターンシップ (学内・学外)					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
企業・公共団体等説明会					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
その他 ()					
挑戦・失敗・成功・成長・課題など					
理想の将来像					

④私のパーソナリティ

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	社会で生かせること
性格的特徴					
表れていた場面・状況など					
行動的特徴					
表れていた場面・状況など					
信念・価値観					
表れていた場面・状況など					
短所 (改善したいところ)					
表れていた場面・状況など					
理想の私					